

【資料紹介】

姥島・烏帽子岩の表記について

平山孝通*¹

先般、次のような質問がありました。

質問：「……機会が有り、烏帽子岩に上陸しました。富士山を遠望し大変感動しました。仲間との話題は、何で〈烏帽子岩〉と呼ぶのか。何で〈姥島〉と呼ぶのか。いつ頃からそのように呼ぶのか。教えて頂きたい……」とのことでした。

さて、筆者も気になります。姥島の高さの調査も進んでいますので、次は名称の変遷を調べることにしました。以下、その一端を記してみました。

回答：まず、次の点を確認しておきましょう。

姥島が正式な名称で、烏帽子岩の名は姥島にある最も高い岩に付けられた通称です。通称とは正式ではなく、世間に通用している名称。また、世間で呼び習わされている名称、通り名です。筆者は以上のように考えています。

さて、烏帽子岩は、どなたでも見れば納得されると思いますが、烏帽子と形が似ています。烏帽子とは烏(からす)の羽に似た黒い帽子で、昔のお公家さんや神主さんのかぶり物に似ているところから名付けられたものと思われます。角力の行司さんがかぶっています。

筆者は古くから付けられた名称と思っていましたが、資料を遡ると明治9年(1876)に初めて烏帽子(岩)が出てきました。

歴史的視点で考える前に、小和田の浜須賀辺りに伝わる「ジンジ、バンバ」の伝説を聞いてください。

姥島の姥とは何でしょうか。姥はお婆さんを意味します。お爺さんは翁(おきな)と言います。その伝説を考えるには小和田・熊野神社の境内の詠み人知らずの歌碑が参考になります。江川太郎左衛門の伝説から考えて江戸時代後期に建

立されたと思われる歌碑には「相模なる小和田が浦の姥島は誰を待つやらひとり寝をする」と刻まれています。意味は、ここ相模の小和田の海辺に翁島と姥島、一対の島がありました。夫婦島です。何時の頃か、翁島がいなくなってしまいました。津波に浚われたのでしょうか。理由は定かではありませんが、いなくなった翁島を何時までも姥島が寂しく待っているというものです。日本昔話の世界です。

この「ジンジ、バンバ」を平成28年の時点で小和田の古老に聞くことができました。

1 では、歴史的視点で考えてみましょう。

古文書、地図、写真などの資料の中にヒントを探しましょう。便宜的に①から通し番号を付けます。

一番古い資料は江戸時代初期の漁場争いの資料にみられます。漁場争いは古くから続けられていて、江戸時代になって急に発生したものではありませんが、寛文の頃は村境が確定された時期であったために、以前からの慣行を制度化していく過程での争いと考えられます。海上に境界を付けることは難しいので陸地からの見通しで境を明らかにしたことがわかります。見通しの目標が姥島の一番高い地点です。

寛文3年(1663)6月11日の茅ヶ崎村の訴状には「①茅ヶ崎小和田境、海ハ白石之岩、陸は手白塚より見通しに、先規之通村境相立…」とあります。茅ヶ崎村と小和田村の境は海の白石之岩と陸の手白塚(菱沼村)を見通したところとあります。

翌、4年6月4日に幕府から裁定が下され、茅ヶ崎村と小和田村の浜境論に決着が付きしました。小和田の旧家に残る「裁許絵図」の裏書には「②手白塚ヨリ祖母嶋之中央ニ有之大石ヲ見

通シ可為境目……」とあり、手白塚より祖母島の中央の大石を見通した線を村境としています。村境は、郷境、郷境道、桜道、ラチエン通りなどと呼ばれ今日も親しまれています。江戸時代の裁定の結果によって道が真っ直ぐになったのです。

寛文3、4年頃には、白石之岩、祖母嶋、大石と呼ばれていました。

(出典：『茅ヶ崎市史1』406-7p)

③元禄3年(1690)に「見返り美人」で有名な浮世絵師・菱川師宣が描いた『東海道分間絵図』には「うは(者)嶋」と記されています。絵は師宣の作でしょうが、地名の呼び方はどのように確認したのでしょうか。地域の人に聞いたのでしょうか。

(『写真集 ちがさききのうきょう』58p)

④海岸に開設された江戸幕府の和流砲術場である鉄砲場は、享保13年(1728)にできていますので、それ以降に描かれた「相州高座郡八ッ松原大筒場」の絵図には「ウバガ石」と記されています。絵図は、村の名主級が務める「鉄砲場見回役」が情報提供をして作成すると思われるので、地域の人たちの呼び方といえるのでしょうか。姥島が大筒の標的になったという伝承がありますが、戦後の占領下における米軍の演習以前に標的にされていたのでしょうか。

(『写真集』68p)

⑤文化3年(1806)完成した『東海道分間延絵図』には「姥ヶ嶋」と記されています。

⑥天保12年(1841)完成した地誌、『新編相模国風土記稿』の「茅ヶ崎村」の「平島・乳母島」の項に次のように記されています。

(『茅ヶ崎市史史料集3』9p)

「○平島比良之末 海上五町許にあり、南北四、五町東西一町に過ず、○乳母島宇波之末 海上十二町許(1309.09 ㌺)にあり、方一町島の東少許を隔て小嶋あり、正保・元禄の図面に矢根嶋(島)と記す、今其の唱を失ふ、この辺より海苔鹿尾菜(ひじき)等を産す、人家及び樹木共になし」 【一町=約 109.0909 ㌺、一間=1.81818

㌺、一丈=3.0303 ㌺】

「乳母島」は、宇波之末と読み方が付けられています。「うはしま」と書いて「うばしま」と読むのでしょうか。海上十二町許(1309.09 ㌺)にあり、方一町、広さは一町四方です。島の東少しばかり隔て小嶋があります。正保時代(1644~7)、元禄時代(1688~1703)の図面には矢根嶋(島)と記されています。天保12年(1841)の今はその呼び方はありません。この辺より海苔・鹿尾菜(ひじき)等が取れます。人家及び樹木はともにありません。

正保改定図(1644~7)、元禄改定図(1688~1703)には「姥島」、「矢根島」と、今考定図(天保12年、1841)には「乳母島」「平島」と記されています。

(大日本地誌大系『新編相模国風土記稿3』巻之59(収録図252-4p)、昭和45年、雄山閣)
⑦江戸時代後期の作と考えられる「須賀湊図」があります。平塚の馬入村方面から茅ヶ崎の中嶋村、柳嶋村、姥嶋、江嶋、遠く三浦郡山々、三寄を眺望した絵図です。それには「姥嶋」とあります。島は「嶋」と「嶋」を区別しているので、姥嶋の「嶋」には意味があるのでしょうか。

(『写真集』65p)

⑧「相模奈る小和田可浦乃宇婆嶋者誰越末津やらひとり寝を寿流」

当初話題とした「ジンジ、バンバ」の伝説を思い出してください。熊野神社の歌碑に刻まれた公家某の和歌で、江戸時代後期の建立でしょう。以前は尾根明神社(出口町)にあったのですが、詳細は不明です。

(『資料館叢書10』100p)

【明治・大正期】

明治・大正期の資料を検討してみましょう。

⑨まず、『地誌提要』です。明治7年(1874)から10年にかけて刊行されもので、編集を手がけた内務省地誌課の責任者は次のように述べています。

「地誌は風土記の撰より、後千余年、殆ど散失。……幕府編修に従事すると雖もその成る所

僅かに数州のみ、今郡県治を為し、この時に当たり全国の地誌を撰し以て一代の典に備うべし」

「千年前の風土記は殆ど散失してしまった。そこで、江戸幕府が編修に従事したが、完成したのは数州である。今、全国の地誌を編さんして、今後の参考に」と述べています。

和銅6年(713)に編さんされた『風土記』の逸文の相模国には、鎌倉と足柄付近のみで茅ヶ崎の記述はありませんが、幕府が編修した「相州」の地誌は残されていました。江戸時代の基本文献である『新編相模国風土記稿』を指します。「新編」とは奈良時代の『風土記』に対して「新に編さんした相模国風土記」ということでしょう。

3回目の編さんの『新々編相模国風土記』ともいえる『地誌提要』をみてみましょう。

『地誌提要』巻之17、「相模国」の茅ヶ崎関連には、「相模川、祖母島」の記述がありますが、簡単な内容です。

「祖母島
一名乳母島、高座郡小和田茅ヶ崎二村ノ南貳拾町(2181.8 ㌺)ニアリ、東西壱町、南北同上、茅ヶ崎ノ南貳町(218.18 ㌺)ニ平島アリ」、これだけです。(『市史史料集3』231p)

⑩明治8年10月の「小和田村茅ヶ崎村入会姥嶋元図」には「字姥嶋 第壱番」と記されています。

(「姥島とその信仰について」『文化資料館調査研究報告』20) ついに、「えぼし」が登場します。

⑪明治9年(1876)の「……望遠鏡で見ると、それは歯の形、あるいは神主の帽子的形をした変わった岩である。望遠鏡を見せてくれた女性が、その岩礁はE b o o s h i (エボシ)と呼ばれているのだと私に教えてくれる。これは帽子を意味する。……」

(『1876 ボンジュールかながわ』(有隣新書)158p) フランス人のエミール・ギメの神奈川紀行に、「E b o o s h i」とあります。ギメ博物館の創立者が、明治9年に来日した時の一コマです。

その3年後に記された資料を紹介します。小

和田村の主立った人による記述です。

⑫明治12年(1879)2月13日編成された『皇国地誌村誌』の「小和田村」ですが、他村の標記とは異なり「村誌」の前に「島」の項目があり、島々を詳しく紹介しています。それには「姥ヶ島又烏帽子岩、尾根島トモ唱フ、中央ヨリ、西南々海岸ヲ距十八町五十間(2054.545 ㌺)ニシテ本郡(高座郡)茅ヶ崎村トノ界ナル海面ニ突起シ両村ニ属ス尤モ高キ岩ヲ元根又形ヲ以テ筆岩トモ呼フ七丈五尺(22.727 ㌺)アリ……」以下には、周辺の島々の名称が列記されています。

続いて、「尾根神社此島ニアリシカ屢暴風ニ破壊スルヲ以テ元禄年間(1688~1703)本村(小和田村)字ツト田ニ移ス今ノ姥母神社是ナリ歌ニ、サガミナル コワダノウラノ ウバガシマ タレヲマチツ、 ヒトリネゾスル」とあります。⑧の熊野神社の境内の歌碑を参照してください。

姥ヶ島、烏帽子岩、尾根島、元根、筆岩、ウバガシマと6つの名称が記されています。

名称の多さだけでなく、「島」の項目を特出して他村とは扱い方に違いがみられます。島への思いが強い村なののでしょうか。

(『市史史料集3』74-7p)

次は、地図の表記を並べてみましょう。

⑬明治13年~19年に作成された「第一軍管地方二万分一迅速測図(着色)」には、「姥嶋」と記されています。明治10年(1877)の西郷隆盛らの反乱による西南戦争で地理の不案内で苦戦した政府軍は、全国の地図の作成に着手しました。茅ヶ崎村付近は明治15年6月、7月に、小和田村は6月に測量をしました。

(『茅ヶ崎市史現代7地図集』40、42p)

⑭明治15年測図16年製版 30,000「迅速図」には、「姥島・烏帽子岩・帽子岩」と記されています。烏帽子岩の南に「帽子岩」があります。この地図だけに記された島名ですが、何でしょうか。(『市史2』付録の地図)

⑮明治15年測図16年発行 20,000「迅速図」

には、「平島」（姥島付近掲載なし）と記されています。（『地図集』56-7p）

⑯ 明治15年30,000「迅速図」には、「姥島・烏帽子岩・平島」と記されています。

（茅ヶ崎市教育センター作成教材用地図）

⑰ 明治42年（1909）12月発行『南湖院（アルバム）』（初版）の「院歌第4、眺望の部」の一節に、

「人に好かる江の島は 之に列ぶは姥島や
灘の東に降り立ち 平嶋と呼ぶ小島群

浅海の黒き平島の 老女の腰を屈む如

南東に白き烏帽子岩 烏帽子の立てる如くなり」とあります。写真2葉が収録されていて「烏帽子岩」、「烏帽子岩背景」のキャプションが記されています。（茅ヶ崎市史編さん担当蔵）

⑱ 明治末年に海浜旅館「茅ヶ崎館」で発行した吉岡班嶺筆「茅ヶ崎八景」の一景に「姥嶋ノ帰帆」が描かれています。

（『文化資料館調査研究報告』14、36p）

⑲ 大正2年（1913）12月発行『南湖院（アルバム）』（3版）、初版⑰に同じ。（筆者蔵）

⑳ （明治42年測図）、大正2年発行50,000「地形図」には、「姥ヶ嶋」と記されています。

（『地図集』50p）

㉑ 大正10年発行、30,000「地形図」には、「平島、姥島（烏帽子岩）」と記されています。

（茅ヶ崎市教育センター作成教材用地図）

㉒ （大正10年修正測図）大正11・14年発行、50,000「地形図」には、「姥島・烏帽子岩」と記されています。（『地図集』51p）

【昭和戦前期】

昭和20年までの資料を検討してみましょう。

㉓ 昭和3年（1928）1月発行の茅ヶ崎小学校編『生活の凝視と学校経営』の「第7項郷土の名所」に「姥島」の解説があります。

「海岸から二十数町の沖合い、白波を蹴つて突兀(ごつ)と聳える奇巖が見える、これが姥島である、高さ三丈余、形の烏帽子に似て居るので烏帽子岩とも呼ばれる。付近に岩礁多く珍しい魚貝や海藻類が多い、扁舟を泛べてこの無人

島に遊ぶのも一興」とあります。

奇巖と呼ばれて興味を引かれる人も多かったのでしょう「扁舟を泛べてこの無人島に遊ぶのも一興」とあります。小舟で島に渡り、遊ぶ人もいたのでしょうか。

なお、明治10年代に編さんされた『皇国地誌』は、市域23ヵ村のうち茅ヶ崎村のみ発見されていませんが、『生活の凝視と学校経営』はその欠を補う貴重な資料といえます。

（『市史史料集3』217p）

また、地図を並べてみましょう。

㉔ 昭和9年（1934）5月25日茅ヶ崎町役場発行（大日本地図学会編纂、製図、製版、定価25銭）の「茅ヶ崎町全図」には、「平島、姥島」と記されています。浜から平島までの最短距離は450m、同じく姥島までは1350mとあります。

（『こわだ、小和田地区コミュニティーセンター30周年記念誌』6p）

㉕ 昭和10年代初めに作成されたと思われる「湘南茅ヶ崎東海岸高砂分譲地」の案内図には、エボシ岩、平島が描かれて「海岸を離ること僅かに四百米の高燥地……」とあります。国道134号を「海岸道路」と記しています。横須賀線が横須賀駅までですので、昭和19年以前の様子です。カラー表紙のデザインは数本の松越しに、富士山を背にしたエボシ岩、平島と舟が数艘描かれています。

（『写真集』157p、松野幸雄氏蔵）

㉖ 昭和12年～14年発行、30,000「地形図」には、「平島、姥島（烏帽子岩）」と記されています。

（茅ヶ崎市教育センター作成教材用地図）

【戦後・昭和後期】

昭和20年代から同60年代の資料を検討してみましょう。

㉗ 昭和23年（1948）発行、50,000「地形図」には、「平島、姥島（烏帽子岩）」と記されています。（『地図集』52p）

㉘ 昭和32年発行、米極東陸軍地図局作成、

50,000「戦略地図」には、「Hira-shima 平島、Uba-shima 姥島」と記されています。米軍の地図に烏帽子岩の記述はありませんが、訓練の標的とされ、形が大きく変化して、祠も痕跡を残すのみです。〔写真4参照〕(『地図集』84p)

②⑨昭和33年10月茅ヶ崎市役所発行の「茅ヶ崎市全図」(アメリカ議会図書館蔵)には、「平島、姥島、烏帽子岩」と記されています。

(『地図集』175p)

③⑩昭和35年7月31日開催の『茅ヶ崎文化人クラブの例会報告』に、第2回名勝めぐり「烏帽子岩探訪」の記録があります。「会員二十数名が漁業組合前を出航、姥島に上陸、海女(夏は志摩あたりから出稼ぎに来ている)が潜って取って来てくれるさざえ、うになどをその場で頂戴、一同満悦、誠に楽しい一日であった」と記されています。

「烏帽子岩探訪」と称して、姥島に上陸しています。出稼ぎの海女さんがいた記録は貴重な報告といえます。(茅ヶ崎市立図書館蔵)

③⑪昭和38年10月発行の『昭和39年茅ヶ崎市明細地図』には、「平島、姥島、烏帽子岩」と記されています。

(市史編さん担当蔵、市立図書館蔵)

③⑫昭和42年(1967)10月に市制施行20年を記念して制定された「茅ヶ崎市歌」(川原利也作詞)の1番に「光あふれる湘南の 白い雲わく相模灘 えぼしの岩に散る波は 松の緑にこだまする 茅ヶ崎 ああ若さ呼ぶまち ああ 茅ヶ崎」とあります。ちなみに2番では富士山を、3番では相模川を詠っています。

(『市民便利帳』参照)

③⑬ - ③⑮昭和43年・44年、50年・51年、61年・62年各発行の50,000「地形図」には、「平島、姥島、烏帽子岩」と記されています。

(『地図集』53-5p)

③⑯ - ③⑲市民栄誉賞受賞の桑田佳祐さん(サザンオールスターズ)作詞の歌詞の中にもエボシ岩が詠われています。エボシ岩が3カ所、エボシラインが1カ所あります。

昭和57年(1982)1月発売の「チャコの海岸物語」に、昭和61年(1986)4月発売の「夜風のオンザビーチ」に、平成12年(2000)7月発売の「ホテルパシフィック」に「エボシ岩」とあります。平成2年(1990)9月発売の「希望のわだち(轍)」に「エボシライン」とありますが、これは桑田さんの造語かもしれません。

③⑳昭和57年3月発行の『市史5、概説編』の口絵「茅ヶ崎の夜明け」には次の記述がみえます。

「朝は雲の色から明け初める。色は秒を刻むように移り変わって、やがて光は流れるように海へ広がる。静まり返る姥島もたちまち夜明けの色に包まれる。…」と、

茅ヶ崎海岸の描写としては、烏帽子岩より姥島がふさわしいのでしょう。

④⑩『市史5、概説編』(376p)の「史話」にも姥島が登場します。

④⑪昭和63年(1988)6月にJR茅ヶ崎駅の相模線ホームの端に「えぼし岩ミニチュワ園」が開園しました。

【平成期】

最後は、平成時代を検討してみましょう。

④⑫平成5年(1993)に「烏帽子岩めぐり遊覧船」が通航しました。

④⑬平成9年に『えぼし岩 湘南の郷愁 日の出に魅せられて 高橋昭和写真集』が発行されました。高橋さんはここ何十年と夜明け前から毎日茅ヶ崎海岸に佇みその沖合をカメラに収めています。

④⑭平成14年(2002)にコミュニティーバス、ニックネーム「えぼし号」が発車しました。

④⑮平成22年3月、3版発行『茅ヶ崎市史ブックレット6、茅ヶ崎の歴史遺産』の「烏帽子岩」の解説には「ラチエン通りを抜けて国道134号を渡り、茅ヶ崎海岸しおさいの散歩道に出て沖合を眺めると左手に江ノ島、右手に平島がみえる。そして、この二つの島を結んだ線のちょうどまん中あたりに、縦長の小さな島がある。

これが姥島、通称烏帽子岩と呼ばれている岩礁である。…烏帽子岩は、五つの主な岩礁と無数の小岩礁からなる硬砂岩質の岩礁群＝姥島岩礁（総面積約3000㎡）の一つで、…岩礁群の中では最も大きいものである。なお、姥島岩礁のうち、無数の小岩礁は大正12年（1923）の関東大震災で隆起したものである……」とまとめています。〔写真6参照〕

『同ブックレット』口絵の昭和初期の写真には、鳥居3基と祠が写っています。今日でも上陸すると鳥居の脚穴の跡と祠の跡が確認できます。〔写真4・5・絵葉書2参照〕

④⑥「演習場チガサキ・ビーチ範囲図、姥島」（25p）、写真のキャプションには「烏帽子岩」（29p）と記されています。

（平成23年3月発行『茅ヶ崎市史ブックレット13、演習場チガサキ・ビーチ』）

④⑦平成27年（2015）11月に「えぼし岩」のオブジェが、茅ヶ崎市役所本庁舎2階のテラス庭園に旧本庁舎より移設、開園しました。

④⑧「烏帽子岩を標的にしてやるんです。岩の頂点が撃たれてしまって烏帽子ではなくなってしまうました」、元小和田漁業協同組合組合長（昭和2年生まれ）への聞き取り「演習中遭難の米兵を助ける」の発言の一節です。

（平成28年3月発行『ヒストリアちがさき8』77-80p）

④⑨平成28年度「湘南遺産」に「茅ヶ崎・烏帽子岩」として選定されました。

④⑩平成29年7月21日～23日の夏祭り特別上演後に、9月16日から全国公開された映画『茅ヶ崎物語』の解説には、「…桑田たちが烏帽子岩に初上陸を果たし、演奏するシーンだ。…」とあります。桑田さんたちサザンオールスターズは、姥島でなく烏帽子岩に初上陸したんですね。

④⑪茅ヶ崎市立西浜中学校編発行の『姥島、烏帽子岩』（2018年3月）には、最新の論文4本が掲載されています。詳細は4の総合的視点の文献を参照してください。

④⑫平成30年（2018）11月18日執行市議補選「選挙公報」のある候補者の記事には、「えぼし岩海の自然体験教室実行委員会事務局」云々と市長も参加した事業の報告がありました。

④⑬平成30年11月23日号『タウンニュース、茅ヶ崎版』に「えぼし岩（姥島）高さは14.615m」測定結果を発表、とありました。これは11月16日に教育長が南湖公民館で開かれた、ちがさき丸ごと博物館企画展「南湖ザミューリアムクロージングイベント」で発表したものです。

諸説あったえぼし岩（姥島）の高さが、おおかた確定しました。

筆者はえぼし岩（姥島）の高さを問われると、昭和53年発行の『茅ヶ崎市明細地図』（明細地図社）に記されている根拠不明の「14.94m」と答えていましたが、今後は「14.615m」と答えることにします。

④⑭『広報ちがさき』平成31年2月1日号の「湘南広域ニュース」に「えぼし岩周辺で水揚げされる地場産の海藻「早摘みヒジキ」の収穫が茅ヶ崎市内で最盛期を迎えています。…」と、えぼし岩周辺のヒジキの水揚げの記事がのりました。④⑮の『新編相模国風土記稿』に記載された「この辺（姥島）より海苔鹿尾菜（ひじき）等を産す」と同じ「ヒジキ」などの収穫は、江戸時代後期から180年程変わらぬ茅ヶ崎の海の幸の豊さを伝えています。〔絵葉書1参照〕

2 自然史的視点では、次の文献を参考にしましょう。

奥村清・小室明彦・鈴木進「茅ヶ崎市姥島の地質」『神奈川地学』60（1978年）

茅ヶ崎の自然研究委員会編「姥島（烏帽子岩）の動物」『文化資料館調査研究報告』1（1993年）

相原延光・野木直樹「茅ヶ崎市姥島の地質について」『同上』17（2008年）

鈴木進・蟹江康光「神奈川県南東部に分布する中新統三浦層群三崎層の放散虫化石年代」『神

奈川博調査研報（自然）』14（2012年）によると姥島の誕生は1200万年前とみえます。

関東大震災による隆起の研究は、平塚市博物館『秋期特別展、後世に残したい相模川流域の地球遺産』（2015年）収録の「茅ヶ崎周辺」に詳しく、隆起した波食台の説明が興味深く有益です。なお、柳島・中島付近では関東大震災による隆起の話を聞くことがかつてはありました。

3 民俗学・伝説的視点では、次の文献を参考にしましょう。

「口承伝承」、「姥島 今は烏帽子岩と呼ぶ人が多い。昔はオネバアサンとかウバジマと呼んだ。烏帽子岩とは南湖の人がつけた名だという人もいる。片瀬、腰越、お婆さん、一步も歩けない。…大正7年頃まで、12月28日に家の人が姥島まで正月のお飾りをしにいった。大島の娘が柳島の藤間徳左衛門に嫁いだ。その時の嫁入り道具の一つが姥島である。平島は姥島の子供だそうである」との、報告があります。（『資料館叢書、柳島生活誌』（1979年）181-2p）

須藤格「姥島とその信仰について」『文化資料館調査研究報告』20（2011年）

平山孝通「柳田別荘の思い出」『同上』11（2003年）

「山島民譚集2」『定本柳田国男集』27、「ジンジ、バンバの伝承」の解説が参考に成ります。

4 総合的視点では、次の文献を参考にしましょう。

『えぼし岩のひみつ、はまけい・烏帽子岩エコツアーガイド』（2版, 2015年）

最新の姥島（烏帽子岩）の文献は、市立西浜中学校編『姥島、烏帽子岩』（2018年）があり、4氏の地質、自然、漁業、歴史の論文が掲載されています。カラー写真が豊富で読み応

えがあります。島の名は「姥島」で統一されています。編集にご尽力された市立西浜中学校の名取龍彦教頭に敬意を表します。

鈴木 進「はるか南の海に誕生した姥島」

岸 一弘「姥島の生物」

杉本斐香「姥島近くで営まれる茅ヶ崎の漁業」

名取龍彦「地域の宝もの姥島」

5 表記のまとめ

さて、茅ヶ崎市の沖合1600m付近にある「島」の名称はいくつあるのでしょうか。資料の順に記してみましよう。資料番号は初出のみです。

①寛文3年(1663)6月、白石之岩¹ ②寛文4年6月、祖母島²、大石³ ③元禄3年(1690)、う者嶋⁴ ④享保13年(1729)以降、ウバガ石⁵ ⑤文化3年(1806)、姥ヶ島⁶ ⑥天保12年(1841)、乳母島⁷、姥島⁸ ⑦江戸時代後期、姥島⁹ ⑧江戸時代後期、宇婆嶋¹⁰ ⑩明治8年(1876)10月、姥嶋¹¹ ⑪明治9年、Eboshima¹² ⑫明治12年(1879)2月、姥ヶ島¹³、烏帽子岩¹⁴、尾根島¹⁵、元根¹⁶、筆岩¹⁷、ウバガシマ¹⁸ ⑭明治15年-16年、姥島・烏帽子岩¹⁹の並記 ⑯大正2年(1913)、姥ヶ嶋²⁰ ⑰大正10年、姥島(烏帽子岩)²¹、括弧付きで(烏帽子岩)を付記 ⑱昭和3年(1928)1月、奇巖²²、無人島²³ ⑲昭和10年代、エボシ岩²⁴ ⑳昭和32年(1957)、Uba-shima 姥島²⁵ ㉑昭和42年10月、えぼしの岩²⁶ ㉒昭和63年、えぼし岩²⁷ ㉓平成30年(2018)11月、えぼし岩(姥島)²⁸、括弧付きで(姥島)を付記、巻末絵葉書2、戦前、烏帽子島²⁹の29通りに表記されていました。

なお、姥島⁸、姥島⁹、姥嶋¹¹と姥ヶ島⁶、姥ヶ島¹³、姥ヶ嶋²⁰は異なる表記と考えました。

6 終わりに

茅ヶ崎市の沖合1600m付近にある「島」の名称にこだわってみました。

姥島や烏帽子岩と呼ばれる島です。東西約 600 m、南北約 400 m の無人の岩礁群です。大小 50 以上の岩からなり、面積は約 3000 m²、高さはおおかた 14.615 m です。

正式には姥島、通称は烏帽子のように見えるので烏帽子岩と呼ばれています。

筆者は、江戸時代には烏帽子岩と呼ばれていたのかと考えていましたが、意外にも明治になってからのことでした。しかし、昭和 30 年に建立された句碑の解説にはそのことに触れていました。小生夢坊（むぼう、本名：第四郎）が「……烏帽子岩の名は明治以降のこと……」と記しています。その根拠は何でしょうか。

サザンオールスターズの歌詞で知った人も多いようですが、江の島を烏帽子岩と勘違いしている遠くのファンもいるようです。一度はサザンビーチから沖合を眺めてください。ラチエン通りを海岸に向かい「茅ヶ崎ゆかりの人物館」の最寄りのバス停辺りからみる「お化け烏帽子」にもビックリしてください。

資料を古い順に並べました。出典を記したので、必要に応じて確認してください。

最後に、「姥島」を考えるうえでの今後の課題をあげてみました。

- 1 江戸時代初期の漁場争の顛末。
- 2 享保 13 年以降の鉄砲場での大筒の標的になったとの伝承。
- 3 大正 12 年 9 月の関東大震災による姥島周辺の隆起。
- 4 昭和 21 年～34 年の占領下で米軍演習の標的とされた姥島の変化。
- 5 昭和 30 年 2 月建立の「新田信句碑」に彫られた小生夢坊の解説の検討。

「……烏帽子岩の名は明治以降のこと、古くは姥島と呼び伝えられ……」とある（小和田・熊野神社境内）。

- 6 昭和 57 年 1 月～平成 12 年 7 月に発売されたサザンオールスターズの歌詞によって「えぼし岩」は、全国区に。

- 7 平成 28 年度の「湘南遺産」に「茅ヶ崎・

烏帽子岩」として選定。

- 8 平成 30 年 11 月に高さは、14.615 m と公表。より正確な高さの調査の継続。

謝辞：須藤格氏、久保有生氏、岩城奈都子氏、坂井源一氏、西村智之氏、加藤哲史氏らのご指導、ご協力に感謝いたします。とくに岸一弘氏には多くのご指摘と文献のご提供を頂きました。感謝いたします。写真の選定及び構成に関する三谷恭子氏のご協力にも感謝いたします。

今回の報告をまとめるにあたり、名取龍彦教頭の論考にヒントを得たこと、及び姥島上陸の機会を頂いたことに感謝いたします。ますますのご活躍をお祈りいたします。

*¹ ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



絵葉書 1



絵葉書 2

- 写真 1 渡船えぼし丸で姥島へ
(調査のため特別の許可を得て渡航しています)
- 写真 2 茅ヶ崎漁港から沖合約 1.6 km、渡航
時間約 10 分
- 写真 3 南側から
- 写真 4 祠跡 (南東側)
- 写真 5 鳥居の脚穴の跡
- 写真 6 大小 50 以上の岩礁帯で形成されて
いる
(以上、坂井源一氏・三谷恭子氏提供)
- 絵葉書 1 「茅ヶ崎名所 烏帽子岩」
- 絵葉書 2 「茅ヶ崎名所 茅ヶ崎海岸烏帽」
(以上、加藤哲史氏提供)